

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
令和3年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」
「社会的孤立の生成プロセス解明と介入法開発
: 健康な「個立」を目指して」

太刀川 弘和
(筑波大学 医学医療系 教授)

目次

1. 研究開発プロジェクト名.....	2
2. 研究開発実施の具体的内容.....	2
2 - 1. 研究開発目標.....	2
2 - 2. 実施内容・結果.....	3
2 - 3. 会議等の活動.....	7
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況.....	7
4. 研究開発実施体制.....	8
5. 研究開発実施者.....	9
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など.....	10
6 - 1. シンポジウム等.....	10
6 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	10
6 - 3. 論文発表.....	11
6 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	12
6 - 5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等.....	12
6 - 6. 知財出願.....	12

1. 研究開発プロジェクト名

社会的孤立の生成プロセス解明と介入法開発：健康な「個立」を目指して

2. 研究開発実施の具体的内容

2 - 1. 研究開発目標

(1) スモールスタート期間終了時

社会的孤立・孤独についての定義を定め、孤立にかかわる顕在的・潜在的指標の開発に向けた概念の確立を目指す。同時並行して、孤立のために不可視化されたひきこもり者を調査し、前述の概念が臨床的に妥当かどうかを検証する。コロナ禍における、社会的孤立の深刻化のプロセスを質問紙・面接調査によって解明する。

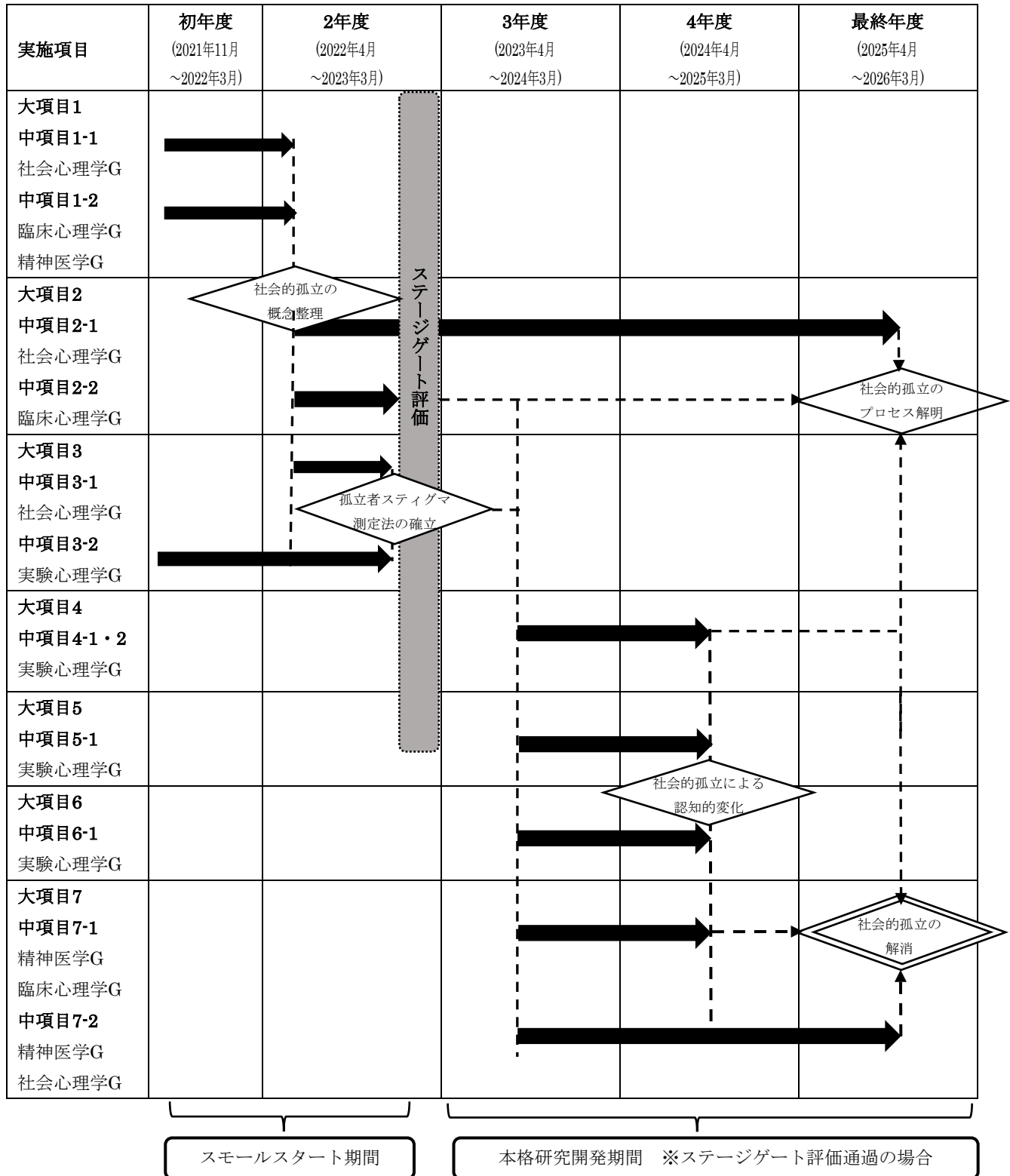
(2) 本格研究開発期間終了時

本格研究では、健康人を対象に社会的孤立化の心理的プロセスを実験的に検討する。その結果が、ひきこもり者や精神障害者に当てはまるかどうかを臨床的に検証する。

スモールスタート期間において得られた概念モデルから指標を開発し、例えば教育プログラム前後での指標評価などにより、PoCを実施する。さらに、心理的プロセスの検証から得られた知見を応用した介入プログラムと社会的孤立者のインタビューを踏まえたドラマ形式のメディア教材を開発し、地域住民への研修により実践を目指す。

2 - 2. 実施内容・結果

(1) スケジュール



(2) 各実施内容

当該年度の到達点①

(目標) 大規模調査による社会的孤立の概念整理

実施項目①-1：社会的孤立者の心理的特徴の解明

実施内容：

社会的孤立には、孤独感を感じ孤立状態から抜け出したいと苦悩している者、世間とのしがらみを嫌い自ら孤立を選択している者など、様々なパターンが存在すると考えられる。安全で健全な孤立と危険で不健康な孤独を分けて考えるために、社会的孤立者の心理的特徴を把握し、そのパターンを分類する。

期間：2021年11月～2022年3月31日

実施者：相羽 美幸（東洋学園大学・准教授）

対象：調査会社のモニターによるオンライン調査を行い、全国からデータを収集した。調査対象者は、64歳以下で精神疾患のない一般成人3,000名と、社会的孤立者の代替者として65歳以上の高齢者もしくは64歳以下で精神疾患のある人500名とした。調査内容は、デモグラフィック変数、孤立と孤独感の心理尺度、孤立と孤独感の詳細、孤立の支援サービス、心理変数、健康関連指標等を尋ねた。

実施項目①-2：社会的孤立の概念構造の解明

実施内容：

社会的孤立の定義そのものが曖昧であることが、これまでの社会的孤立者の研究と支援を結びつける障壁の一つとなっていた。トップダウン的に社会的孤立を定義づけるよりも、ボトムアップ的な定義を目指すほうが、社会的孤立者の多様性を理解することができる。そこで、曖昧な概念に対して「最良の例」を探索するプロトタイプ・アプローチ

(Rosch, 1975)を導入することで、社会的孤立の概念的定義の確立を目指す。加えて、他研究の統計データの二次解析を行い、コロナ禍の孤立概念に関する検討を行う。

期間：2021年11月～2022年3月31日

実施者：白鳥 裕貴（筑波大学・講師）・菅原 大地（筑波大学・助教）

対象：行政・福祉・医療機関等で勤務する対人援助職者300名と非対人援助職者300名に対して社会的孤立者のイメージを尋ねた。加えて、健康な社会的孤立者のイメージについて一般成人298名に調査を行った。このような予備調査を踏まえて、一般成人200名に社会的孤立者を表す言葉がどの程度、社会的に孤立している人を表すかを尋ねた。さらに、これまでのワークショップ等を踏まえて、孤立・孤独に関連する言葉についても、一般成人200名を対象に各単語の類似度の評定を行ってもらった。

当該年度の到達点②

(目標) 社会的孤立に対するスティグマの測定

実施項目①：潜在連合テスト (IAT) によるスティグマの内在化の検討

実施内容：

社会的孤立のスティグマ尺度の作成によって、広く一般的な社会的孤立に対するスティグマの測定が可能になると考えられる。その一方で、スティグマを表明することは社会的に望ましくないとされ、自己報告ではバイアスが働き、スティグマの内在化を正確には把握できない。そのため、Web実験で潜在連合テストを実施し、潜在的レベルでのスティグマの内在化を検討する。本年度においては、本格的な開発の予備的段階として、社会的孤立者に対するスティグマ尺度の暫定版を作成し、信頼性と妥当性の一部を検証した。暫定版の社会的孤立者に対するスティグマ尺度とIATを用いてオンライン実験を行い、妥当性を検討した。

期間：2021年11月～2022年3月31日

実施者：川上 直秋（筑波大学・准教授）

対象：調査対象は、一般成人60名とし、調査・実験ともにオンラインにてデータを収集した。

(3) 成果

当該年度の到達点①

(目標) 大規模調査による社会的孤立の概念整理

実施項目①-1：社会的孤立者の心理的特徴の解明

成果：64歳以下で精神疾患のない一般成人（社会的孤立リスク低群）と65歳以上の高齢者もしくは64歳以下で精神疾患のある人（社会的孤立リスク高群）とを比較した結果、社会的孤立リスク高群は低群よりも自身が社会で孤立していると思っている割合やひきこもりである割合が有意に多く、ソーシャル・サポートやソーシャル・ネットワークの得点が有意に低かった。同様に孤独感についても、社会的孤立リスク高群は低群よりも孤独であると思っている割合が有意に多く、孤独感尺度の得点も有意に高かった。また、社会的孤立リスク高群は低群よりも自尊感情が低く、評価過敏性の自己愛の特徴を強く持っており、主観的幸福感が低いという心理的特徴が見られた。社会的孤立リスク高群はコロナウィルス感染に対する恐怖心や不安も低群より強く見られたことから、コロナウィルスの蔓延により他者との関わりを避けることで益々社会的に孤立してしまう可能性が示された。

実施項目①-2：社会的孤立の概念構造の解明

成果：社会的孤立者に対するイメージについて対人援助職者と非対人援助者を比較した結果、対人援助職者では社会的に孤立することは何かしらの疾患や障害によるものとみなしている傾向がみられるものの、非援助職者にとっては、社会的に孤立することは自己責任的にみなされることが示唆された。また、健康的かつ適応的に孤立している者に対するイメージの調査では、趣味を楽しんでいる人や芸術家・作家といった回答も得られ、本事業で目指している「個立」者の一例となりえると考えられる。

予備調査を踏まえて実施した社会的孤立者を表す言葉についての調査研

究からは、社会的孤立者という概念が適応的—非適応的という次元、障害・差別—自己責任的という次元で大別されることが分かった。さらに、孤立・孤独関連語の調査結果からは、主観的な孤独感を表すカテゴリー（例：孤独感）、客観的な距離・疎遠状況を表すカテゴリー（例：疎遠）、肯定的な孤立状況を表すカテゴリー（例：孤高）に大きく分かれることが分かった。2021年度の研究により、社会的孤立（者）の概念整理が行われ、世間の人々が社会的孤立（者）をどのように捉えているかが明らかとなった。

さらに、Japan Covid-19 and Society internet Survey (JACSIS)の第2回調査のデータを用いた二次解析を行ったところ、孤独が自殺念慮に直接的に、または抑うつを介して間接的に強い影響をコロナ禍で与えていることが見出された。

当該年度の到達点②

(目標) 社会的孤立に対するスティグマの測定

実施項目①：潜在連合テスト (IAT) によるスティグマの内在化の検討

成果：暫定版スティグマ尺度の探索的因子分析を行った結果、スティグマの構造はポジティブなイメージとネガティブなイメージの2因子構造であることが明らかになった。また、各項目の意味の分かりやすさについては、おおむね理論的中点を超えていた。さらに、潜在的な社会的孤立のリスクを測定するためのIATの開発を行った。その予備段階として、当該年度においては、測定において使用する刺激の選定およびオンラインによる実験を実施した。その結果、得られた反応潜時データの分析から、いくつかの課題が浮かび上がった。最も重要な点は、実験に用いた「孤立—連携」という対概念が、本質的にネガティブ成分とポジティブ成分に分けられてしまうため、孤立と連携という他者との繋がりの有無を軸とした基準で分類することができていなかったことである。同時に、本プロジェクトの目指す「健康な個立」という観点からも、ネガティブな孤立のイメージだけでなく、ポジティブな孤立を連想させるような刺激の選定が必要であると考えられる。以上の課題を踏まえた上で、次年度はIATでの測定をより精緻化し、その妥当性を検討する予定である。

(4) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

①現在の進捗状況

- ・2021年度は、社会的孤立の概念整理、大規模調査の実施、オンライン実験によるIATの妥当性の検証、当事者へのインタビューおよび分析手法を学んだ。
- ・2021年度に予定していた研究はほぼ予定通りに終えており、2022年度に向けて倫理申請を行っている。
- ・コロナに関連する各種の総説・JACSIS研究のデータを解析してコロナ禍における孤独と自殺念慮の関係を見出した。

②各実施項目で得られた結果や成果を俯瞰・統合した結果分かったこと

- ・各グループの研究知見を統合すると、社会的孤立（者）に対するイメージやステイグマをとらえるためには、ネガティブな側面だけでなくポジティブな側面も踏まえて検討することが重要であることがわかった。このような気付きは社会的孤立者を「個立」に導いていくための有用な知見を生み出すことにつながるだろう。
- ③当該年度に明らかになった次年度に向けての課題とその解決方法の検討
 - ・各班の研究の中で孤立と孤独の概念理解に違いがあったために、共通の認識を持つようにする必要がある。そのため、次年度は定期的に勉強会を開催し、共通認識を高めていく。

2 - 3. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2021年 11月10日	第1回研究班会議	オンライン	メンバーの紹介、プロジェクトの概要説明、今後の研究予定の確認
2021年 12月8日	第2回研究班会議	オンライン	各研究班からの進捗報告、今後の予定の確認
2021年 12月17日	R3年度プログラム全体会議	JST東京本部 サイエンスプラザB1大会議室（ハイブリット開催）	R3年度採択プロジェクトおよびマネジメントチームの紹介、各プロジェクトの今後の方向性に関する議論
2022年 2月9日	第3回研究班会議	オンライン	各研究班からの進捗・結果報告、今後の予定の確認、サイトビジット
2022年 3月29日	2022年度提案募集に向けた公開ワークショップ	オンライン	社会的孤立・孤独に関する研究開発プログラムの紹介、社会定期孤立・孤独の課題に取り組む研究者と施策現場側との議論・交流

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

こころの医療センターにおいて、斎藤 環（筑波大学医学医療系、教授）らが笠間市のひきこもり事業を展開しており、ひきこもり者へのアウトリーチ活動を通して、研究フィールドの開拓と研究知見の援用を試みている。

4. 研究開発実施体制

(1) 統括グループ

- ①太刀川 弘和 (筑波大学医学医療系、教授)
- ②実施項目：実施項目1～7の総括 (スモールスタート期間・本格研究開発期間)

(2) 精神医学グループ

- ①白鳥 裕貴 (筑波大学医学医療系、講師)
- ②実施項目： (スモールスタート期間)
 - ・社会的孤立の概念構造の解明
(本格研究開発期間)
 - ・顕在・潜在的セルフスティグマ低減のための認知行動療法の効果検証
 - ・社会的孤立解消に向けたパブリックスティグマ軽減と健康な孤立の実現

(3) 実験心理学グループ

- ①川上 直秋 (筑波大学人間系、准教授)
- ②実施項目： (スモールスタート期間)
 - ・潜在連合テスト (IAT) によるスティグマの内在化の検討
(本格研究開発期間)
 - ・アイトラッカーによる社会的孤立者の四角的情報処理特性の検討
 - ・fMRIによる社会的孤立者の社会的情報処理傾向の検討
 - ・社会的排除経験の積み重ねによる心理的変遷の検討
 - ・潜在連合テストによるスティグマ測定のアプリ実装

(4) 社会心理学グループ

- ①相羽 美幸 (東洋学園大学人間科学部、准教授)
- ②実施項目： (スモールスタート期間)
 - ・社会的孤立者の心理的特徴の解明
 - ・孤立という喪失体験における心理的変遷と経緯
 - ・社会的孤立のスティグマ尺度の作成
(本格研究開発期間)
 - ・社会的孤立解消に向けたパブリックスティグマ軽減と健康な孤立の実現

(5) 臨床社会心理学グループ

- ①菅原 大地 (筑波大学人間系、助教)
- ②実施項目： (スモールスタート期間)
 - ・社会的孤立の概念構造の解明
 - ・社会的孤立の代替モデルを対象とした社会的孤立深刻化のプロセス解明
(本格研究開発期間)
 - ・顕在・潜在的スティグマ低減のための認知行動療法の効果検証

5. 研究開発実施者

○総括グループ（リーダー氏名：太刀川 弘和）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
太刀川 弘和	タチカワ ヒロカズ	筑波大学	医学医療系	教授
下条 かをる	シモジョウ カオル	笠間市役所	保健福祉部	部長
斎藤 環	サイトウ タマキ	筑波大学	医学医療系	教授
堀 孝文	ホリ タカフミ	茨城県立こころの 医療センター		院長
高木 善史	タカギ ヨシフミ	東京家政大学	人文学部	特任講師

○精神医学グループ（リーダー氏名：白鳥 裕貴）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
白鳥 裕貴	シラトリ ユウキ	筑波大学	医学医療系	講師
小川 貴史	オガワ タカフミ	筑波大学	大学院人間総合科学研究科	D3
翠川 晴彦	ミドリカワ ハルヒコ	筑波大学	大学院人間総合科学研究科	D4

○実験心理学グループ（リーダー氏名：川上 直秋）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
川上 直秋	カワカミ ナオアキ	筑波大学	人間系	准教授
荒井 崇史	アライ タカシ	東北大学	文学研究科	准教授

○臨床心理学グループ（リーダー氏名：菅原 大地）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
菅原 大地	スガワラ ダイチ	筑波大学	人間系	助教
黒田 真由	クロダ マユ	筑波大学	大学院人間総合科学研究科	M1
鹿島 有歌里	カシマ アカリ	筑波大学	大学院人間総合科学研究科	M1

○社会心理学グループ（リーダー氏名：相羽 美幸）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
相羽 美幸	アイバ ミユキ	東洋学園大学	人間科学部	准教授
古村 健太郎	コムラ ケンタロウ	弘前大学	人文社会 科学部	准教授

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

- ・なし

(2) ウェブメディアの開設・運営

- ・筑波大学人間系研究活動、
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/research/archives/45669>、2021年11月
- ・筑波大学「知」活用プログラム、
https://www.osi.tsukuba.ac.jp/fight_covid19_topics/1388/、2021年11月

- ・ 東洋学園大学公式サイト、<https://www.tyg.jp/research/detail.html?id=9828>、2021年11月
- ・ つくばサイエンスニュース、<https://www.tsukuba-sci.com/?column01=sdgs%e9%81%94%e6%88%90%e3%81%ab%e6%ac%a0%e3%81%8b%e3%81%99%e3%81%93%e3%81%a8%e3%81%8c%e3%81%a7%e3%81%8d%e3%81%aa%e3%81%84%e7%a4%be%e4%bc%9a%e7%9a%84%e5%ad%a4%e7%ab%8b%e3%83%bb%e5%ad%a4%e7%8b%ac>、2021年12月
- ・ 筑波大学「知」活用プログラム、https://www.osi.tsukuba.ac.jp/fight_covid19_topics/1454/、2022年3月

(3) 学会 (6-4. 参照) 以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・ 第55回茨城人工透析談話会共催セミナー、コロナ禍における患者・医療者のメンタルヘルス、2021年11月14日、つくば国際会議場
- ・ 第9回稲敷地区地域連携懇話会、コロナ禍における自殺予防、2022年1月21日、オンライン
- ・ 日本精神神経学会第17回記者勉強会、自殺とメディア報道：コロナ禍の自殺予防の視点から、2022年1月28日、オンライン
- ・ 筑波大学附属病院認知症疾患医療センター第18回研修会、コロナ禍の認知症対応とメンタルヘルス、2022年2月10日、オンライン
- ・ 筑波大学附属病院安全衛生委員会研修会、医療従事者の自殺予防対策、Covid-19 長期変化に備える！病院職員メンタルヘルス研修会、2022年2月16日、つくば市
- ・ 札幌市立大学FSDS研修会、コロナ禍における学生および教職員のメンタルヘルス、2022年2月17日、オンライン
- ・ 茨城県医療従事者うつ病・自殺予防対応力向上研修事業研修会、コロナ禍のうつと自殺予防、2022年2月24日、オンライン
- ・ 筑波大学看護学類実習協議会、コロナ禍における学生・医療者のメンタルヘルス、2022年3月4日、オンライン

6-3. 論文発表

(1) 査読付き (1 件)

●国内誌 (0 件)

●国際誌 (1 件)

・ Ogawa T, Shiratori Y, Tachikawa H, Sodeyama N, Ota M, Midorikawa H, Arai T. (2021). Association between depressive state and behavioral changes induced by the state of emergency for Coronavirus disease 2019: Evidence from university students in Japan. *Acta Psychologica*. 221, 103445. doi.org/10.1016/j.actpsy.2021.103445

(2) 査読なし (0 件)

6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

(1) 招待講演（国内会議 1 件、国際会議 0 件）

- ・太刀川 弘和、教育講演「コロナ禍のこころのケアと専門職連携」、第14回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会、オンライン、2021年11月14日

(2) 口頭発表（国内会議 1 件、国際会議 0 件）

- ・太刀川 弘和・関根 彩・間中 一至、新型コロナウイルス感染拡大に関連するメンタルヘルスの諸問題～茨城県内の戦いを振り返る～、第69回茨城県精神医学集談会、オンライン、2021年11月2日

(3) ポスター発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

- ・なし

6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿（ 1 件）

- ・不安感増す「コロナ+年度末」、朝日新聞、2022年3月19日号

(2) 受賞（ 0 件）

(3) その他（ 0 件）

6-6. 知財出願

(1) 国内出願（ 0 件）

(2) 海外出願（ 0 件）